

『菩提心論』の不読段に関する一考察

佐々木大樹

一、本稿の目的

本稿で主題とする不読段とは、初学者（特に未灌頂の者）が事相（灌頂・観法等）に深く関わる記事を、みだりに読むことを禁じた伝統である。江戸時代までは、不読段の伝統は遵守されてきたが、明治期以降になると徐々に希薄となり、時代の風潮もあって解説や講義を自由にする流れが生じてきたようである。筆者は、このような風潮に疑念を抱き、十巻章の不読段について近現代の学匠の見解を精査し、「十巻章の不読段に関する一考察―近現代の学匠・著作を中心に―」（二〇一四年、『現代密教』二五、以下「前稿」）を発表した。その要点を整理すると次の通りである。

○十巻章の不説段は講義によらず、講伝あるいは伝授によって継承されてきた。

○不説段の範囲は一様でなく広略の相違がある。例…『弁顕密二教論』『即身成仏義』

○不説段の伝統が希薄化した理由として、聖教の出版・公開、事相に関する自由議論の風潮が挙げられる。

○近代以前でも、一部の学匠は不説段の註釈を行っていた（小田慈舟氏の指摘）。

本稿では、前稿で取り上げた『弁顕密二教論』『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』『菩提心論』のうち、『菩提心論』の不説段「三摩地段」に¹しほり、近代以前の註釈類の検討を通じて、その起源について探ってゆきたい。

二、資料と方法論

龍猛造と伝承される『菩提心論』は、三学録²や十巻章³に収録され、また即身成仏や三昧耶戒の理念に深く関わることから、真言宗徒によって多く研究され、残された註釈書の数は膨大である。『菩提心論』の註釈類を探す上で簡便な資料として、粕谷隆宣氏が作成した「十巻章」『秘蔵宝鑰』『十住心論』関係文献目録⁴は非常に有益である。同目録には『菩提心論』の主要注釈書として一四種、さらにそれを含めて一三一種にも及ぶ註釈類が挙げられているが、これらの中には披見しがたい写本類も多く含まれている。本稿では、現在刊行の『菩提心論』関連資料を中心に、⁵さらに大正大学所蔵の資料、また筆者が所属する真言宗智山派が有する資料も可能なかぎり参照することとした。

本稿では、弘法大師空海（⁷⁷⁴⁻⁸³⁵）を始点として、編年的に『菩提心論』不説段に関する記述を検証してゆくが、便宜上、平安・鎌倉等の時代区分を取り入れ論述した。

まず撰述年代と不説段の有無を中心に、『菩提心論』の註釈類を整理すると次表となる。

『菩提心論』の不説段に関する一考察

『菩提心論』註釈書と「三摩地段」註釈の有無

三摩地段を註釈する資料…● 三摩地段を註釈しない資料…○

	『菩提心論』註釈類／西暦	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
平安期	①遍滿『金剛頂菩提心論略記』		●未詳 (～1115年)							
	②濟暹『金剛頂發菩提心論私抄』		●未詳 (～1115年)							
	③覺鏤『發菩提心論秘釈』		●未詳 (～1143年)							
	④——『菩提心記訣』		●未詳 (～1165年)							
	⑤榮西『金剛頂宗菩提心論口訣』		●1186年							
鎌倉期	⑥明恵『納涼坊談義記』		●1225年							
	⑦道範『菩提心論談義』		●1240年							
	⑧頼瑠『菩提心論初心鈔』		●1260年							
	⑨頼瑠『菩提心論愚草』		●1265年							
	⑩承澄『菩提心論勘文』		●1265年							
	⑪——『發菩提心論義記』		●未詳 (～1318年)							
南北朝・室町・安土桃山期	⑬杲宝『菩提心論問書』				○1349年					
	⑭本圓『菩提心論密談鈔』				●1371年					
	⑮宥快『發菩提心論鈔』				○1387年					
	⑯実順『菩提心論口筆』				●1405年					
	⑰快全『菩提心論三摩地段鈔』				●未詳 (～1424年)					
	⑱快全『菩提心論問題』				○未詳 (～1424年)					
	⑲——『菩提心論三摩地秘談』				●未詳 (～江戸期)					
江戸期	⑳亮汰『菩提心論教相記』						1677年○			
	㉑亮汰『菩提心論第三段秘記』				未詳 (1670～1680年) ●					
	㉒恵照『菩提心論観心鈔』						1681年●			
	㉓尊祐『菩提心論科文林』						1686年○			
	㉔義剛『菩提心論教相記蒙引』						1715年○			
	㉕覚眼『菩提心論撮義鈔』					未詳 (～1725年) ○				
	㉖曇寂『菩提心論私記』						1728年●			
	㉗曇寂『菩提心論追記』						1730年●			
	㉘亮海『菩提心論講苑』						1746年○			
	㉙卓義『菩提心論初心鈔記』						1751年●			
	㉚周海『菩提心論探秘』						1760年●			
	㉛隆瑜『菩提心論拾要記』							1848年●		
	㉜義範『菩提心論私記』							1877年○		

三、弘法大師空海の『菩提心論』三摩地段理解

弘法大師空海は、龍猛の著作として『菩提心論』を多く引用するが、その中でも『秘藏宝鑰』第十秘密莊嚴心では、『菩提心論』三摩地段の全文を引用し、その前後で自身の考えを述べている。まず引用の直前では、密教の三摩地として種々の名を挙げ、「すなわちこれ大日如来の極秘の三昧なり。文広くしてつづさに述ぶること能わず」（『弘法大師全集』第一輯四六六頁）と述べている。そして、三摩地段の引用を終えた後、いわゆる「問答演義」の箇所では、三摩地法に関する用心を次のように述べている。

「答、真言教法は一々の声字、一々の言明、一々の義、一々の成立、各の無辺の義を具せり。劫を歴とも窮盡し難し。…（中略）…若し実の如く説かば、小機は疑を致し、謗を生じて、定んで一闡提、無間の人と為らん。是の故に応化の如来は秘して談ぜず。伝法の菩薩は置いて論ぜず。意は此に在り。故に『金剛頂経』に説かく、此の毘盧遮那三摩地の法は、未灌頂の者に向かいて一字をも説くことを得ず。若し本尊の儀軌・真言は、縦い同法の行者なりと雖も、輒く説くことを得ざれ。若し説くは、現前には天に中り、殃を招き、後には無間獄に墮せんと云々」（『弘法大師全集』第一輯四七二頁）

ここでは、小機の者に対して深い真言教法を説くと、かえって疑念や誹謗を抱かせる結果となるから、三摩地や儀軌・真言をたやすく説いてはならないとしている。ここで引用される『金剛頂経』とは、『時処儀軌』の取意とされてきたが、引用元にはない「毘盧遮那三摩地の法」という表現が使われていることは注目すべきである。この表現を選んだ背景には、おそらく『菩提心論』三摩地段が念頭にあったであろうし、さらに金剛智^{（六七四）}（六七四）訳『毘盧遮那三摩地法』（大正藏No.八七六）の「八葉白蓮一時間…」の偈頌が想定されていた可能性も考えられ

る（後述）。

上記の引用は、三摩地等の相承に対する空海の慎重な姿勢を窺わせるものであり、不読を感じさせるが、不読段との明記はない。三摩地段の不読が、空海の意図に適うものかは不明であるが、後世、三摩地段を不読段とする伝統が形成されてゆく段階で、前のような密教特有の考え方が根拠になったものとも考えられる。

四、平安期の三摩地段理解

前稿において取り上げたように、近現代の学匠の多くは、「伝統」を理由に三摩地段の解説を止め、あるいは躊躇いながらも解説を行ってきた。この度、平安期（一一一八三年頃）に属する『菩提心論』の古い註釈類を検討したところ、意外にも、いずれも三摩地段を註釈しており、不読の様子も窺われない。また後世に見るように行願・勝義は教相、三摩地は事相の領域という意識も表立っては見受けられない。

① 遍満撰『金剛頂菩提心論略記』全一卷

『正統藏経』第一輯九五冊三四五～三五二頁所収。

本書は唯一、中国で製せられたと伝承される『菩提心論』の註釈書であり、唐代の僧である遍満（不生説年評）の撰述とされている。『正統藏経』所収本は、その奥書によれば治承四年（一一八〇）に書写され、梅尾山高山寺に秘蔵されてきたものとされる。⁸⁾ 本書は、『菩提心論』に関する最古の註釈書とされるが、その作者や撰述をめぐって種々の疑難が持たれてきた（『密教大辞典』二〇五五頁参照）。実際に同書を読むと、金剛薩埵から龍猛への付法に関連して、中国のみならず、日本にまで密教を伝えて人々を救済すべきと記されており、日本撰述の可能

性を窺わせる。

しかし、すでに②濟暹撰『金剛頂發菩提心論私抄』に引用されることから、平安時代に存在した蓋然性は高く、仮に日本で撰述されたとしても初期の『菩提心論』理解を知る上で重要なものと考えられる。本書では、三摩地段を含め『菩提心論』全文を簡潔に注釈しており、不説段等の記述は全く見られない。

②濟暹撰『金剛頂發菩提心論私抄』全四卷

『大正新脩大藏經』第七〇卷五〜二八頁（大正藏No.二二九二）所収。

本書は、濟暹（一〇二五）による古い註釈の一つであるが、撰述年次は明らかではない。堀内規之氏の研究によれば、天和二年（一一〇九）、寛助（一〇五七）が復興した仁和寺伝法会で、濟暹は講師として『菩提心論』の講説を行っており、本書の撰述と関連するとも考えられる。¹¹『大正新脩大藏經』所収本は、東寺宝菩提院に伝わる平安時代の写本に基づくが、卷二・三が欠落しており、卷一・四のみが参照可能である。その巻四では、「夫会阿字者：」以降の三摩地段を詳細に註釈しており、そこには不説の言及はなく、むしろ真言行者は積極的に密教の三摩地を修めるべきとの意識が垣間見える。¹²

③覺鑿撰『發菩提心論秘釈』（『菩提心論題釈』全一卷

『興教大師全集』上巻四九〜七〇頁、『大正新脩大藏經』第七〇卷一〜五頁（大正藏No.二二九二）、改訂補『日本大藏經』第四七卷二八七〜二九五頁所収。

真言宗中興の祖、興教大師覺鑿（一〇九五）が、本論の題号について十門に分けて深秘釈を示したものであるが、

現存資料では十門中の一・二門の解説しかない⁽¹³⁾。撰述年次は未詳である⁽¹⁴⁾。本書の後半の十門では、即身成仏と関連させて題号を註釈する中で、三摩地段中の要文を引くが、不読等の言及は見られない。

④撰者未詳『菩提心記決』全一卷

『真言宗全書』第八卷九〜一一頁所収。

本書の撰述年次は未詳であるが、長寛三年（一一六五）の京都高山寺所蔵写本に基づくことから、最古の註釈である可能性も否定できない。また撰述者も不明であるが、『真言宗全書』解題（三〇頁）では、書写者である範杲（不生没年）が撰述者ではないかとの見解が示されている。本書の後半には、脱落と思われる空白が四カ所（十七行分）あり、文意が不明な箇所も少なくない。しかし、その紙幅の大半を三摩地段の解説に費やし、五銚杵や十六大菩薩の秘説を述べることから貴重なものであり、そこに不読の様子は見受けられない（『真言宗全書』会報二七参照）。

⑤栄西記『金剛頂宗菩提心論口決』全一卷

『増補日本大蔵経』第四七卷三〇九〜三一六頁、『大正新脩大蔵経』第七〇卷二九〜三二頁（大正蔵No.二二一九三）所収。

本書は、臨済宗の祖とされる栄西（一二三四）による註釈で、高野山伝法院の高覚房覚範（不生没年）からの要請に応じて、文治二年（一一八六）七月三日に書いた口決である⁽¹⁵⁾。問答の形式で各段を解説し、三摩地段の註釈を行っている。ただ「八葉白蓮」の偈頌のうち、結印（入智印）に関しては割注で「師に問へ」（『改訂日本大蔵経』第

四七卷三二四頁上段)となっており、註釈本文とは別に師からの口伝があった様子が窺われる。

以上の他、同時期の貴重な注釈書として、実範(生年不詳¹⁵)撰『菩提心論開見鈔』の写本が現存し、東寺や金沢文庫に所蔵される。従来は全二巻のうち上巻のみ現存と考えられてきたが、近年、田戸大智氏が兵庫県・温泉寺に伝わる上下巻を完備する同書を発見した。¹⁶その研究成果によれば、『菩提心論開見鈔』には、後世の『正法眼蔵』『禪苑清規』が引かれることから実範の撰述ではなく、一二〇二〜一三二八年の間、東密学匠による著作と結論付けられている。『密教大辞典』二〇五三頁の分析によれば、おそらく下巻は三摩地段の註釈であろうと推測されるが、今回は実見の機会を得ず取り上げることができなかった。

五、三摩地段所収の『毘盧遮那三摩地法』の偈頌

ここで前の⑤栄西『金剛頂宗菩提心論口決』と関連して、『菩提心論』三摩地段に引用される『毘盧遮那三摩地法』(大正蔵No.八七六)の偈頌について言及しておきたい。

「八葉白蓮一肘間 炳現阿字素光色 禅智俱入金剛縛 召入如来寂靜智」

(『大正新脩大蔵経』第一八卷三二八頁中段)

この偈頌は、阿字観に関する最古の典拠であり、真言密教の相承、また臨終行儀や引導法において重用されてきた。例えば興教大師覺鑿は、その著作である『一期大要秘密集』『八葉観』『阿字月輪観』『印信大事』等において、この偈頌を度々引用しており、これこそが極楽往生・仏果得脱のための要文・印であると述べている。¹⁷北尾隆心氏の研究によれば、興教大師覺鑿以降、この偈頌は『菩提心論』三摩地段から独立して、『菩提心論灌頂』(印

信』が成立し、多くの流派において師資相承されたようである。¹⁹⁾

『国書総目録』中には、金剛三昧院の『菩提心論灌頂』、高野山持明院・東寺宝菩提院の『菩提心論灌頂印信』の名が見えるのみだが、筆者は幸いにも智積院に相承される写本『菩提心論灌頂』を見ることができた。この資料は、宝曆十一年（一七六一）四月二十二日に幸賢（不生没詳年）によって書写されたものであり、臨終の大事として偈頌を引き、簡潔に外縛印や阿字に関する深秘積が示されている。

この偈頌に付随する印明の相承は、基本的に師から弟子に秘密裏に口伝されてきたようであり、鎌倉期以降の註釈中では、⑧「秘事有り、更に問へ」等の言も見受けられる。またこの偈頌については、¹⁷⁾「三摩地法の全文なり」という理解も存在したようであり、偈頌の印明に限定されていた秘密性が後世、拡大解釈されて三摩地段全体を不読とする理解が生じたとも、一つの可能性として考えられる。

六、鎌倉期の三摩地段理解

平安期と同様、鎌倉期（一三三三～三三三三頃）の『菩提心論』註釈類においても、一貫して三摩地段を註釈しており、不読の言及も見受けられない。しかし、⑧頼瑜『菩提心論初心鈔』の記から推察されるように、同時期より行願・勝義は教相、三摩地は事相という意識が芽生え、また偈頌「八葉白蓮…」の秘密性が強められ相承されていったと考えられる。

⑥明恵述『納涼坊談義記』全一卷

前川健一『明恵の思想史的研究—思想構造と諸実践の展開—』（二〇一二年、法蔵館）三〇一～三二五頁所収（慶

應義塾大学三田メディアセンター所蔵本に基づく翻刻)。

本書は、嘉禄元年(一二二五)九月、神護寺納涼坊の伝法会において、明恵(一二七三)が七日間にわたり『菩提心論』を講義し、それを隆詮(生没年不詳)が記録したものである。⁽²¹⁾前川健一氏による翻刻を見ると、勝義段等を「初心極位」であると結んだうえで、簡潔ながらも三摩地段の要点を述べており、特に不読の様子は見えな。ただ、「八葉白蓮」の偈頌については全く言及していない。

⑦道範記『菩提心論談義』(『菩提心論御談義問書』全二卷)

『改訂補日本大藏經』第四七卷三一七～三四七頁所収。

本書は、延応二年(一二四〇)五月に、道助法親王(一二九六)の御前で行われた『菩提心論』の談義に基づき、正智院道範(一二五八)が記したものである。⁽²³⁾本書は問答の形で、『菩提心論』の本文を解説するものであり、下巻において「八葉白蓮」の偈頌を含め三摩地段の全体を説明している。その解説の背景には、即身成仏を果たすためには三摩地の実践が不可欠との認識があったものと推測される。⁽²⁴⁾同書において、三摩地は実修すべきものであるから無益な談論は不要としながらも、三摩地段を不読とする理解は見受けられない。

⑧頼瑜撰『菩提心論初心鈔』全二卷

『改訂補日本大藏經』第四八卷九一～一三五頁所収。

本書は、新義真言教学の大成者とされる頼瑜(一二三〇-四六)が、文応元年(一二六〇)、木幡院に滞在した折に、あ
る人の勧めによって初心の披覽のために撰述したものである。『菩提心論』の本文に沿って解説し、下巻におい

て三摩地段もまた註釈されており、不読の言及も見られない。ただ上巻の最後では、行願・勝義は「教相の分」としており、三摩地段は事相に属すべきとの理解が読みとれる。また「八葉白蓮」の偈頌の箇所では、註釈とは別に「秘事」があるから師に問うべきことを述べている。⁽²⁷⁾

本註釈書は、江戸期に版本が作成され、後の⑬杲宝述『菩提心論聞書』や⑮宥快『発菩提心論鈔』とともに流布したようであり、智山書庫には最多の十一本が現存しており、智山の教学を考える上でも重要なものと考えられる。

⑨ 頼瑜撰『菩提心論愚草』全四卷

『続真言宗全書』第一一巻一〜一七七頁所収。

本書は、文永二年（一二六五）七月に高野山伝法院で行われた伝法会談義に基づき、頼瑜が撰述した註釈であり、さらに弘安三年（一二八〇）十月、醍醐寺・清瀧礼殿で開かれた秋季談義を反映して加筆されたという。本書は、『菩提心論』の本文に沿いながら論義の項目を立て、問答形式で註釈している。巻三・四において三摩地段に関する事項が詳細に論じられており、偈頌「八葉白蓮…」の箇所でも同様である。

⑩ 承澄撰『菩提心論勸文』全四卷

『増補日本大蔵経』第四八巻一〜九〇頁、『大正新脩大蔵経』図像第九卷五九四〜六三八（『阿娑縛抄』一八三〜一八五）所収。

本書は、台密の学匠である承澄（一二三〇）が、談義等で見聞した『菩提心論』の要点を一種の備忘録として文

永二年（一二六五）四月にまとめたものである。⁽²⁰⁾ 中巻の中途から最後まで、「八葉白蓮……」の偈頌の箇所を含め、三摩地段を詳細に解説しており、不読との言及は見られない。

⑪ 撰者不詳『發菩提心論義記』全一卷（智積院新文庫所蔵写本）

本書は、『仏書解説大辞典』等に未収録の資料であるが、新文庫の目録二四〇頁によれば鎌倉後期頃の書写とされる。奥書には、書写年次として文保二年（一三一八）、嘉暦二年（一三二七）の記があり、本書の撰述はその年次を遡るものと考えられる。⁽²¹⁾ 表紙には、「亮盛」の識語があるが、おそらく伝持者と推測される。本書では、『菩提心論』の大意を述べた後、論題・撰者・訳者に次いで本分解釈が行われるが、行願・勝義のみである。表紙に「發菩提心論義記卷上」とあることから、巻下には三摩地段の解説があったものと推定されるが欠本している。

⑫ 安超記『菩提心論見聞』全四巻

『大正新脩大藏經』第七〇卷三三〜一六頁（大正藏No.2294）所収。

本書は、嘉暦三年（一三二八）八月七日、尾州の安樂寺で行われた談義をもとに安超^{（不生發祥）}が記したものであり、天台宗・台密の立場が示されている。⁽²²⁾ 同書の巻三の途中「三摩地事」以下、三摩地段に関する事項が問答を交え詳細に解説されており、不読の言及は見当たらない。

七、南北朝・室町・安土桃山期の三摩地段理解

南北朝・室町・安土桃山期（一六〇〇年頃）には、『菩提心論』三摩地段への註釈を省略（Ⅱ不読）する傾向が生じ、行願・勝義は教相、三摩地は事相という認識が顕著となってくる。^⑭『菩提心論密談鈔』奥書には、「三摩地段相承血脈」という系譜が登場し、また三摩地段のみに特化した註釈類として、^⑰『三摩地段鈔』や^⑱『三摩地秘段』等が撰述されるようになった。三摩地段の註釈を省略する同時期の註釈書として、^⑬杲宝『菩提心論聞書』や^⑮宥快『発菩提心論鈔』の名が挙げられるが、両註釈書は、江戸期に度々版本が作られ流布したことから、後世、不読段の伝統が確立される時に多大な影響を与えたものと考えられる。

⑬ 杲宝述『菩提心論聞書』（Ⅱ菩提心論鈔）全七卷

『真言宗全書』第八卷一〇五―一七頁、『改訂増補日本大藏経』第四八卷一三七―二四五頁所収。

本書は、貞和四年（一三四八）十二月から翌五年十二月の東寺勧学会の恒例談義において、読師を勤めた杲宝（二三〇三）の口説をもとに、聴衆（『真言宗全書』解題三三二頁では賢宝と推測）が筆記したものである。^⑳

本書は、初めて三摩地段を省略した註釈書と考えられるが、不読の理由として「雑秘密事を説くの間、之を略す」と述べている。^㉑『真言宗全書』解題三四三頁の「著者略伝」によれば、杲宝は性心（二三六七）にも師事したとされるが、この性心は「三摩地段相承血脈」に名を連ねる学僧であり、同師より三摩地段に関わる秘訣を相承したものと考えられる（次項^⑭参照）。

本書は江戸期に版本が作成され、^⑳頼瑤撰『菩提心論初心鈔』や^㉑宥快『発菩提心論鈔』とともに流布したよ

うであり、智山書庫には『菩提心論鈔』（七卷本）の名で五本が収蔵されている。本書の後世への影響は宥快の註釈とともに大きかったようであり、例えば、江戸期の⑧亮海『菩提心論講筵』では、不読の理由として杲宝と宥快の両註釈の名を挙げています。

⑭本圓『菩提心論密談鈔』全五卷

『真言宗全書』第八卷一三〇―一〇四頁所収。

本書は、山城男山八幡の善法律寺の教覚上人本圓（一三三〇―一三五七）が、深草金剛寿院での先師性心（一二八七）の密談を書き留めたもので、後に伝授の要請をうけ、さらに清書・校合を重ね、応安四年（一二七二）六月に完成させた。『真言宗全書』解題三〇―三二頁によれば、主に『金剛頂經』を所依としながら、九〇部に及ぶ経軌章疏を参照したと評される。偈頌「八葉白蓮…」の箇所を含め、卷二から卷五まで三摩地段を詳説しており、本書は三摩地段の註釈が主題であったと考えられる。本書の奥書には、興味深いことに「三摩地段相承血脉」として、相承系譜が明かされている。

⑤大圓上人
「良胤」

⑥相意上人⑦圓光上人⑧行乘上人⑨先師上人

⑩圓珠―良合―良胤―性心―本圓（一三〇―一〇四）（『真言宗全書』第八卷一〇四頁上段）

『真言宗全書』解題では、この系譜のことを醍醐金剛王院相伝の三宝院流に相承される『菩提心論』の大事口決（三〇）としている。この相承に名を連ねる良胤（一二三二）、圓珠（不生没詳年）、良合（不生没詳年）、良胤（不生没詳年）は、いずれも『菩提心論』の註釈書を著していないが、性心は『菩提心論密法鈔』全三巻を著している。『仏書解説大

辞典』等によれば、この『菩提心論密法鈔』の写本は、種智院大学（旧京都専門学校）所蔵とされるが、問い合せたところ現在は消失しているという。師の性心と弟子本圓の註釈書を比較対照できれば、三摩地段相承の内実が明らかになる可能性が高かっただけに残念であり、他の書写本が現存することを期待するのみである。『密法鈔』という題からすると三摩地段を註釈していた蓋然性が高く、本圓もまた、その学風を継承して積極的に三摩地段を註釈したものと考えられる³⁷⁾。

⑮宥快述『發菩提心論鈔』全十卷

『真言宗全書』第八卷二二三～三六七頁、『改訂補日本大藏經』第四八卷二四七～三八四頁所収。

本書は、至徳四年（一三八七）五月頃、宝性院で行われた談義において、南山教学の大成者と評される宥快（^{三四}三四六五）が『菩提心論』について講じ、その口説をもとに聴衆が筆記したものである（『真言宗全書』解題三三三頁上段参照）。

本書においても三摩地段が省略されるが、理由は明記されておらず、また宥快自身の意図なのか、あるいは筆者の判断であるのかも不明である。『仏書解説大辞典』によれば、宥快には他に『菩提心論問書』（宝寿院所蔵写本）、『菩提心論口筆』（同所蔵写本）、『菩提心論古草』という註釈を著したようであるが、筆者は未見である。本書は、江戸期に版本が作られ広く流布したようであり、智山書庫には『菩提心論鈔』（十巻本）の名で十本が現存している³⁸⁾。智山書庫所蔵本を概観するならば、⑧頼瑜『菩提心論初心鈔』、⑬泉宝『菩提心論問書』とともに、本書はよく読まれたようであり、江戸期における不説段の定着において、強い影響を与えたものと推測される。

⑯実順『菩提心論口筆』全一卷（大正大学所蔵版本）

本書は、応永十二年（一四〇五）、小野末資の実順（不生涯詳）が、高野山西谷の草庵において客僧の要請に応えて『菩提心論』を講じたものと記される。実順は当初、勝義・行願の二段のみを扱い、三摩地段を省略したところ、南都律宗の栞城の要望があつて、三摩地段を講じたという。聴衆には、他に同宿・祐潤・師豪等がいたという。³⁹筆者が見たものは、寛文九年（一六六九）の版本であるが、これは三摩地段に限定して詳細な解説を行うものであり、おそらく勝義・行願の口筆もまた存在していたものと考えられる。⁴⁰本書は、『菩提心論』本文に割注の形で註釈を加えるが、その冒頭「第三三摩地者……」の箇所、三摩地段を註釈する理由を次のように示している。

「如是觀已者とは、勝義・行願の二心を捐つる。是れ則ち悲・智の二徳は、助行を成ずと雖ども、三摩地の心を欠しぬれば、成仏の実益を得るに由し無し。故に何能証等を云う。『不空心要』に云わく、若し此の三摩地を修せずして、成仏を得るといわば、是の処は有ること無し。之を思うべし」（二丁右）

引用によれば、勝義・行願はあくまでも成仏の助行であり、三摩地の実修がなければ、成仏の実益を得ることができないとの見解が示されている。

⑰快全記『菩提心論三摩地段鈔』全一卷

『真言宗全書』第八卷三六九～三九八頁所収。

本書は、高野山の学匠である快全（生年不詳 四四四）による三摩地段に限定した註釈であり、不読の言及は見られない。『真言宗全書』解題三三三頁によれば、本来は行願・勝義の二段を含めて全体の註釈であったが、後に三摩地段のみが独立して同題が付されたと考えられている。⁴¹『真言宗全書』解題の三三三頁および三五五～三五二頁によれば、

快全は宥快に師事した学僧であり、その著作には宥快の口説が多く含まれることから、⑮宥快『發菩提心論鈔』と併せて本書を読むことにより、高野の宝門相伝を知ることができる。とされる。

三摩地段の偈頌「八葉白蓮…」では、結印についての師伝を記すとともに、「学者の一義に云わく、今、此の四句の文は三摩地法の全文なり」（『真言宗全書』第八卷三八三頁上段）という説が示されている。引用の「三摩地法」は、『毘盧遮那三摩地法』なのか、あるいは『菩提心論』中の三摩地段を指すのか不明であるが、いずれにしろ同偈頌に密教の精髓が集約されているとの見解を示しているものと考えられる。一つの可能性として、後世、同偈頌の印明に限定された秘密性が拡大解釈され、三摩地段全体を不説段とする理解が生じたとも考えられる。

⑱快全口『菩提心論問題』全二卷（智山書庫所蔵活字本）

本書は、本論の流れに沿って問答形式で問題点を取り上げ、その意味を説き明かすもので、寛文六年（一六六六）に高野山金剛峯寺で開版され、明治十三年版（一八八〇）も現存している。著者は前⑰と同様に快全であるが、三摩地段に関わる問題は取り上げず、省略しているようである。

⑲撰者不詳『菩提心論三摩地秘談』全一卷（智積院新文庫所蔵写本）

本書は、『仏書解説大辞典』等に未収録の資料である。表紙には、「菩提心論三摩地秘談」の題号があり、表紙下方には「第二重 第三重」の記、さらに書写者あるいは伝持者と推測される「弘賢」の識語が見える。題号の下には、本書の撰述と関わるであろう「丙刀」、「深圓」（あるいは源圓か）という人名が記されるが詳細は不詳である。新文庫の目録（二四一頁）には江戸期写本と記されるが、本論ではその内容から暫定的に江戸期以前の

註釈と位置づけた。

本書の文字は判読が難しいが、三摩地段に関する秘説を述べており、おそらく談義が元になったものと推測される。本書の構成は特殊であり、三摩地段の前半と後半を入れ替えて、まず「凡人心如合蓮華花仏心如満月」から最後までを扱い、「以上第二重畢」とし、その上で三摩地段の冒頭から「法爾応住普賢大菩提心」から五相成身觀までを解説し、「以上秘々中深秘畢／第三重畢」と記している。

八、江戸期の三摩地段理解

江戸期（一八六七年頃）になると行願・勝義は教相、三摩地は事相という認識が固まり、⑬杲宝『菩提心論聞書』や⑮宥快『發菩提心論鈔』等の先例にならって、三摩地段を不読段とする理解がある程度、共通認識となつたようである。近現代の諸学匠における不読段の理解は、直接的には同時期の伝統に由来するものと推測される。しかし、不読段が伝統として定着する一方、⑳亮汰『菩提心論第三段秘記』、㉑惠照『菩提心論觀心鈔』、㉒曇寂『菩提心論私記』、㉓同『菩提心論追記』、㉔卓義『菩提心論初心鈔記』、㉕周海『菩提心論探秘』、㉖隆瑜『菩提心論拾要記』のように、三摩地段を積極的に註釈する書も存在しており、江戸期の理解も一様でなかったことが分かる。

㉔亮汰述『菩提心論教相記』（附『菩提心論教相記玄談』）全二卷

『続豊山全書』第三卷四七～九〇頁所収。

本書は、豊山・長谷寺第十一世能化の亮汰（一六二〇）が、延宝四年（一六七六）から翌五年にかけて著したも

ので、序文にあたる『菩提心論教相記玄談』と、本文にあたる『菩提心論教相記』との二つから構成される。『菩提心論教相記玄談』によれば、亮汰自ら初学者のために本論を分科し、平易に解説したものとしている（『続豊山全書』解題一七―二〇頁、大沢聖寛記参照）。『菩提心論教相記』には、三摩地段の本文を載せるも、分科および解説を控えており、その理由について、『菩提心論教相記玄談』で述べた通りであるという。⁽⁴²⁾

「五に記の意を叙ぶれば、論を開くに三門なり。一は行願、二は勝義、三は三摩地なり。相承の伝に云わく、初の二門は教相に於いて之を談じ、後の一門は事相に就いて之を習う」（『菩提心論教相記玄談』…『続豊山全書』第三卷四七頁下段）

亮汰が相承した伝によれば、行願・勝義は教相の場で談じてよいが、三摩地のみは事相の領域、すなわち阿闍梨に就いて伝授を受け、実習すべきとしている。このような記述は、初学者向けに著されたという本書の性格に由来するものである。⁽⁴³⁾

② 亮汰撰『菩提心論第三段秘記』全一卷

『続豊山全書』第三卷九一―一〇三頁所収。

本書は、『続豊山全書』解題二〇―二二頁（大沢聖寛記）によれば、②『菩提心論教相記』の完成した延宝五年（一六七七）から延宝八年（二六八〇）の間、亮汰五六才から五九才までに完成された著作とされる。⁽⁴⁴⁾ 本書は、亮汰が相承した秘説にもとづき、三摩地段に限定して詳細に解説するが、三摩地段の偈頌「八葉白蓮…」の箇所では、「此の頌は、是れ更に秘伝多し。明師に就いて之を習え」（『続豊山全書』第三卷九七頁下段）と述べている。このような記述からは、三摩地段の中でも、「八葉白蓮…」の偈頌は、阿闍梨からの伝授を前提とする特別なも

のとの認識が読みとられる。

②② 惠照『菩提心論観心鈔』全二卷（大正大学所蔵版本）

本書は、智山・運徹（一六九四）門下の学僧である惠照（一七〇八）が、延宝九年（一六八二）に著した注釈書であり、三摩地段を含め本論全体を解説している（『智山全書』解題四六八頁参照⁵⁵）。本書は『菩提心論』本文を記載し、割注の形で解説を施すが、その冒頭「第三言三摩地者：」で、三摩地段に示される秘観こそが本論の核心と述べており、註釈をした理由と考えられる。

「論の詮要は更に他の事に非ず。將に即ち斯の秘観を授けんとするに在り」（下卷二丁右）

②③ 尊祐『菩提心論科文林』全一卷（大正大学所蔵版本）

本書は、長谷寺・豊山第十六世能化の尊祐（一七四五）が、天和四年（一六八四）に撰述した注釈書で、貞享三年（一六八六）に版本が刊行された。その序文によれば、初学者用として、②②亮汰『菩提心論教相記』はまだ難しいから、より簡略にしたとの意が記されている（二丁右）。本書もまた三摩地段の本文を載せるものの、それに対する科文および解説を省略している。

②④ 義剛『菩提心論教相記蒙引』全二卷（智山書庫所蔵写本）

本書は、高野山の学僧である義剛（生年不詳）による注釈書であるが、三摩地段の解説は省略されている。義剛は省略の理由として、下巻末で②②亮汰の序文『菩提心論教相記玄談』の名を挙げている。

「○下の所明三摩地文は、第三段を解かざるの所由を言う。○宝鑰証第十、九種住心を引証す前々に已に顕る故に今は続いて第十を明す。○『玄談』に述ぶるが如し。委説を玄叙に譲る」(七六丁左)

②⑤ 覚眼述『菩提心論撮義鈔』全二卷

『智山全書』第八卷三五三―三七六頁所収。

本書は、智山・智積院第十一世能化の覚眼(一六四三)が、初学の末徒のために撰述した『十卷章撮義鈔』の一本である(『密教大辞典』二二七頁、『智山全書』解題二一九頁の佐藤隆賢記および同四七二頁参照)。本書の撰述時期は明らかでないが、智山勸学会・智心会編『国訳 菩提心論撮義鈔』(二〇〇五年)によれば、一連の撮義鈔が著された貞享元年(一六八四)から元禄十年(一六九七)頃の撰述と考えられる。本書では、三摩地段の解説が省略されており、五相成身觀や三密行等は、教相の場で談じてはならないとしている。

「△第三言三摩地者等已下は、単えに三摩地の菩提心を釈す。此の三摩地の釈段は、五相・三密の内証を顕わす。教相の所談に非ざる故に、講論の庭に臨んで講呪を省く。故に今亦た略して鈔らざること知んぬべし」(『智山全書』第八卷三七六頁上段)

覚眼が三摩地段を省略した要因として、本書が初学者向けの註釈であったことが挙げられる。さらに『仏書解説大辞典』第九卷四二六頁によれば、本書は宥快の⑮『発菩提心論鈔』を主に依用しており、その学風の影響もまた考えられる。

②6 曇寂記『菩提心論私記』全四卷

『統真言宗全書』第十一卷二〇一～三三二頁所収。

本書は、山城五智山の学僧である曇寂(一六七四)が、享保十三年(二七二八)に母の廻向を目的に撰述したものである。⁽⁴⁶⁾行願・勝義の両段は、主に⑫杲宝『菩提心論聞書』を引用するが、卷三の中途(『統真言宗全書』第一一巻七五頁)以降および卷四で三摩地段を詳細に解説しており、不読の言及も見られない(『統真言宗全書』解題五五～五七頁参照)。

②7 曇寂記『菩提心論追記』全四卷

『統真言宗全書』第一一巻一三一～三六三頁所収。

本書は、曇寂が享保十五年(一七三〇)に真言の教えを学ぶ徒弟のために記したものである。⁽⁴⁷⁾註釈書^{②6}にもとづく講義録であるが、本書では三摩地段を含め、『菩提心論』の要文を取り上げて註釈しており、前書^{②6}と同様、不読の様子は見受けられない(『統真言宗全書』解題五七頁参照)。

②8 亮海撰『菩提心論講筵』全二卷

『智山全書』第八巻七六一～七八〇頁所収。

本書は、智山の学匠である亮海(一七九八)が、弘法大師への報恩の念から十巻章全編の講演を誓い、延亨二年(一七四五)十二月、調月村の大歳大明神内の神宮寺において、百余人の僧を集めて講義したものの抄録である。⁽⁴⁸⁾本書は度々書写されたようであり、書題が異なるものの『菩提心論講述』全二巻(智山書庫所蔵写本)は同一本、

また因応記『菩提心論講筵』全二卷（大正大学所蔵写本・明治二七年写）は同一系統の本である。本書では、三摩地段の註釈を省略するが、その理由として⑬杲宝『菩提心論開書』、⑮宥快『発菩提心論鈔』⁽⁴⁹⁾、⑲覚眼『菩提心論撮義鈔』という三つの註釈書を挙げており、後世への影響を窺うことができる。

「△第三言三摩地者等、『呆宝抄』に云く、三摩地段は、雑る秘密の事を説くの間、之を略す云々。快公の打集の『抄』にも亦た解釈を欠せり。『撮義』に云く、此の三摩地の積段には、五相・三密の内証を説く。

此れ教相所談に非ざる故に、構論^(マ)の庭に臨で講説^(マ)を省く。故に今亦た略して抄せざること知んぬべし云々。是の故に予も亦た筆を自下の文を染めざるなり」（『智山全書』第八卷七八〇頁上〜下段）

⑲卓義『菩提心論初心鈔記』全二卷

『豊山全書』第七卷三六三〜四一七頁所収。

本書は寛延四年（一七五二）九月、豊山勸学院で開かれた⑧頼瑜『菩提心論初心鈔』の講義をもとに、豊山の学僧である卓義^(不姓没年)が筆録したものである（『豊山全書』附録三二二頁参照）。初に⑳亮汰の『菩提心論教相記玄談』を引き、後に頼瑜の⑧『菩提心論初心鈔』や⑨『菩提心論愚草』に従って解釈しており、下巻では三摩地段の註釈も行っている。

⑳周海述『菩提心論探秘』全二卷

『豊山全書』第八卷二五九〜三七三頁所収。

本書は宝暦十年（一七六〇）、豊山の学僧である周海^(一七六〇)が、武州鷲宮大乘院において述作したものであ

る（『豊山全書』附録三二頁参照）。本書の下巻（『豊山全書第八卷三三七頁下段』以降では、「八葉白蓮…」の偈頌を含め、三摩地段について詳細に解説しており、不読の言及は見られない。

③1 隆瑜『菩提心論拾要記』全三卷（智山書庫所蔵写本）

本書は弘化五年（一八四八）、智山・智積院第三十三世能化の隆瑜（一七五三）が記したものである。本書の第三巻において三摩地段を細かく解説しており、偈頌「八葉白蓮…」の説明には約七丁もの紙面を費やしている。三摩地段の冒頭では、当段こそが本論の要であり、この段があつて初めて勝義・行願の二門も瑜伽深秘の智・悲になると述べられており、三摩地段を註釈した理由と解される。^{⑤1}隆瑜が撰述した『：拾要記』を含む著作には、曇寂の影響が大きいと指摘されており、三摩地段を註釈した同師の学風を継いだものとも考えられる（『智山全書』解題四九七頁等参照）。

③2 義範誌『菩提心論私記』全一卷（智山書庫所蔵写本）

本書に関する書誌は不明な部分が多いが、冒頭および奥書には、明治十年（一八七七）四月三十日の日付と「義範誌」と記される。義範とは年代的に、おそらく智山・智積院第四十一世能化の佐々木義範（一八三〇）と目される。本書の上余白には、「四月十五日開講」「第二席十六日」「第三会十七日」から始まり、最後に「以上十四席講演畢」と記されることから、『菩提心論』に関する講義録とも考えられる。本書では、三摩地段を省略することから、おそらく初学者向けの註釈書と推測される。

九、小結

本論では、実見可能な『菩提心論』の註釈書三二種類を集め、近代以前の諸学匠が、本論の不読段である「三摩地段」をいかに理解し、扱ってきたのかを探った。前稿で取り上げた近現代の諸学匠は、三摩地段の不読を自明の「伝統」として受け止めてきた感があったが、今回、編年的に諸註釈を検討した結果、意外にも平安期・鎌倉期には、三摩地段も註釈されていたことが判明した。ただ、⑤栄西『金剛頂宗菩提心論口決』等で述べたように、三摩地段に含まれる「八葉白蓮」の偈頌に関する印明のみは、師から伝授されるべきものとして、秘密裏に口伝相承されていたようである。

鎌倉期になると⑧頼瑠『菩提心論初心鈔』の記から推察されるように、行願・勝義の両段は教相、三摩地は事相という意識が芽生え、不読段の下地が形成されていったものと考えられる。

南北朝期以降の諸註釈になると、初めて三摩地段の註釈を省略することが行われたが、これこそが不読段の始まりを示すものといえよう。その嚆矢となるのは、⑬杲宝『菩提心論聞書』であり、さらに⑮宥快『発菩提心論鈔』も続き、これらの両学匠の学的姿勢が、後世に強い影響力を持ったものと考えられる。なぜ唐突に三摩地段の不読が始められたのか具体的理由は不明であるが、一つの可能性として、偈頌「八葉白蓮」に関する秘密性が三摩地段全体に敷衍されたものとも考えられる。

このような三摩地段を不読とする流れが生じた一方で、⑭本圓『菩提心論密談鈔』に記すように「三摩地段相承血脈」なるものが生まれ、⑰『…三摩地段鈔』や⑱『…三摩地秘段』という三摩地段に特化した註釈書も造られるようになった。

江戸期以降になると、主に⑬杲宝や⑮宥快等の先例にならって、三摩地段を不読段とする理解が共通認識としてある程度確立されたようである。近現代の諸学匠における不読段の理解も、直接的には同時期の伝統に由来するものと推測される。

江戸期以降、三摩地段を不読とする理解が定着した要因として、江戸幕府の下、本山・本寺を中心とする子弟養成が本格化し、初学から灌頂受法までの修道体系が整えられたことや、また従来書写されてきた聖教が、版本として流布されるようになったこと等が考えられるが、背景的考察に関しては今後の課題としたい。

他方、江戸期においても、⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚のように三摩地段を註釈するものが少なからず確認された。亮汰は、初学者向けの㉛『菩提心論教相記』を著した時には三摩地段を不読とする一方、㉜『菩提心論第三段秘記』を著した時には三摩地段を詳細に註釈している。概観する限り、このような認識は、江戸期の諸学匠の共通認識であったと目され、初学者向けには不読段を設けるが、已灌頂者向け、あるいは自身の備忘記としては三摩地段の註釈・考究も行われていたものと窺われる。

本稿で試みた註釈類の分析のみでは、不読段の伝承実態の深部に入ることができないが、前の表を一覧して分かるように、少なくとも時代的傾向については明らかにすることができた。その中でも、平安期・鎌倉期といった古い時代において三摩地段の註釈がなされ、その営みが江戸期においても継続されていたという事実は大い。

密教の特質を考慮するならば、不読段は重要であり、遵守されなければならない伝統である。しかし、不読段の意義やシステムが忘れ去られ、その形骸のみが強調・増幅されるならば、いつしか伝統的な三摩地段の修学の方法が失われるのではないかとの懸念を筆者は抱いている。

受け継いだ伝統を盲目的に追従するのではなく、歴史的営みを客観的に俯瞰することを通じて本来の精神を

学び、現代における教学のあり方、法の継承の意味を模索することこそが、我々末徒に課せられた役割であると
思われる。

註

- (1) 『菩提心論』の不説段の範囲については前稿七四頁、その不説段に対する近現代の学匠の見解については前稿八一～八二頁参照。
- (2) 『弘法大師全集』第一輯二二二頁参照。『真言宗所學経律論目録』(三学録)では、真言宗徒の学ぶべき論を二部一部とし、『釈摩訶衍論』全一〇巻とともに、『菩提心論』全一卷を挙げている。
- (3) 現行では、智山版・豊山版・高野版と呼ぶべき「十卷章」が流布し依用されており(前稿の註四参照)、いずれも最後に収録される。本論に関して『大正大藏経』等では不空訳あるいは不空集と記されることが多いが、「十卷章」のものには「龍猛造」と記されるのが一つの特徴である。東武『菩提心論の作者について』(一九七四年、『密教学会報』第一三号)によれば、大藏経の各版や経録を見ても、「龍猛造」とする典拠は何一つないという。弘法大師空海が、本論を引用する時、多くの場合「龍猛菩薩の…」を被せて援引しており、意図的な権威づけである可能性が指摘されている。
- (4) 大澤聖寛『空海思想の研究』(二〇一五年、山喜房)所収。
- (5) 本稿執筆にあたり、現在刊行の『大正新脩大藏経』第七〇巻、『正統藏経』第一輯九五冊、『改訂日本大藏経』第四七・四八巻や、『真言宗全書』第八巻、『統真言宗全書』第一一卷、『智山全書』第八巻、『豊山全書』第七・八巻、『続豊山全書』宗乗部三、『興教大師全集』等に収録される資料を参照した。また各資料の成立や概要を把握するために、付属の「解題」「会報」等を適宜参照した。
- (6) 智山書庫所蔵の資料については、真言宗智山派宗務庁『智山書庫所蔵目録』(一九九四～一九九五年、智山伝法院編集)全三巻、また新文庫所蔵の資料については、宇都宮啓吾編著『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』(二〇一一年、日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)報告書)を参照した。『菩提心論』およびその註釈書として、智山書庫に六一本、新文庫に一四本ほどが所蔵されるようである。
- (7) 『大正新脩大藏経』第一九卷三二二頁上段(不空訳「金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時处念誦成仏儀軌」)
- (8) 治承四年(一一八〇)の記:「右、此の一巻は、梅尾山の

- 秘藏に在り。予は之を相求するに多年と雖も終に得ず。然るに幸いに、これを照合僧都に請ひ、謄写し、焉に畢んぬ。：(中略)：蓋し写本の草書は、且く四百年前の元筆なり。或いは損失し、或いは磨滅するが故に、管見を以て之を繹し、朱を用いて之を補う須論なり」(『正統藏経』第一輯九五冊支那撰述・大小乘釈論部三五二丁右)
- (9) 金剛峰寺の左学頭であった真源は、「：龍猛に灌頂し秘法を伝授し、其の後、早く支那及び日本とを度し、三密の教を師師相承し群生を拔濟せよ」と(『正統藏経』第一輯九五冊三四七丁右)という本文に着眼し、次のような疑念を呈している。
- 「又、三摩地法の遍満の記、世に流行するを之に由り、之を観ずるに意は唐人と為ん。又、記中の本朝人師の解を挙げざるなり。然るに記の首に、其の後、早く支那及び日本とを度し、三密の教を師師相承し群生を拔濟せよと。若し爾らば本朝人師か。更に考えよ」(『正統藏経』第一輯九五冊三五二丁右)左)
- (10) ①遍満撰『金剛頂菩提心論略記』は、②濟暹等の古い『菩提心論』註釈類を始め度々引用されるが、『正統藏経』所収の原文と引用文とが必ずしも一致しておらず、あるいは後世、加筆や校正等の手入れがなされた可能性も窺われる。例えば、②濟暹『金剛頂發菩提心論私抄』で引かれる「故遍満菩提心論疏云。言大阿闍梨者。第二祖師也。金剛薩埵大菩薩云云」(『大正新脩大藏経』第七〇卷八頁上段)の原文は、「言大阿闍梨者第二祖師也梵、曰縛、日羅、怛、縛、摩訶、薩、怛、縛、訖、云金剛薩埵大菩薩云云」(『正統藏経』第一輯九五冊三四七丁右)となっている。また⑦道範記『菩提心論談義』で引かれる「遍満記云。能達諸仏自性者本地法身也。悟諸仏法身者自受用身也。証法界体性智他受用身也」^(一) (『大正新脩大藏経』第四七卷三四五頁上段)が、原文では「能達諸仏自性悟諸仏法身証法界体性智者言諸仏自性者本地法身也言悟諸仏法身者自受用身也」(同三五二丁右)と語順が異なっている。
- (11) 堀内規之『濟暹教学の研究—院政期真言密教の諸問題—』(二〇〇九年、ノンブル社) 一一九頁参照。
- (12) 「是三摩地者とは、これ正しく真言門の頓入の行者を明かす。頭教の修行を経ずして、しかも直ちに真言教法を修行する義なり」(『大正新脩大藏経』第七〇卷二七頁上段)
- (13) 宮坂宥勝『興教大師撰述集』下巻四〇九頁「解題」参照。宮坂宥勝氏は、現存資料について未完、あるいは残欠の可能性を指摘している。
- (14) 大治五年(一一三〇)以降の伝法院会の談義を集積した『打聞集』に「菩提心論談義の時に云わく…」(『興教大師全集』上巻四二六—四二七頁)とあり、その成果が本書撰述に反映されているものとも推測される。
- (15) 「文治二年丙午七月三日／高野山伝法院入寺の覚範^(一)が、頻りに口訣を請うに依りて、同閏七月一日、竊に以て祈請す。：(中略)：同十二月日、文を引く。同三年正月一日、無

- 言念仏の次で草了す。後時に所、改革すべし。宋西説」
 (16) 田戸大智「菩提心論開見鈔」の検討」(『印度学佛教学研究』第五七卷第二号)
 (17) 「八葉観」や「印信大事」において「八葉白蓮…」を引用した後、覺鏡による以下の記述が見受けられる。七頁)「この観は万行の尊主、諸度の帝王、出凡の正門、入仏の直路なり。浅観小行の人は、此の身を捨てずして転じて極楽の上品上生を得ん。深修大勤の類は、彼の心を改めずして密教の大明大日と成る」(『八葉観』…『興教大師全集』下巻一〇二五頁)
 「此の印に就き、引導の眼目は茲に在り。仏果得脱は疑い無き者なり」(『印信大事』…『興教大師全集』下巻九〇六頁)
 また「一期大要秘密集」(『興教大師全集』下巻二〇七頁)、「阿字月輪観」(『興教大師全集』下巻一〇二七頁)でも同偈頌が引用されている。
 (18) 北尾隆心「東密印信の研究(三)」―「菩提心論灌頂印信」―(一九九八年、「密教文化」第一九九・二〇〇号)三四頁参照。
 (19) 「密教大辞典」の「菩提心論灌頂印信」の項(二〇五四頁)によれば、中性院流、慈猛意教流、伝法院流等、多くの流派において相承されてきたようである。
 (20) 頼瑜撰「真俗雜記問答鈔」第一九では、偈頌「八葉白蓮…」の印が、不二大日に関連する秘印であることが述べられて
 いる。『真俗雜記問答鈔』訳注研究会「頼瑜撰『真俗雜記問答鈔』訳註(一)―巻第一―」(二〇一四年、『大正大学綜合佛教学研究年報』第三六号)参照。
 「或る『書』に云く、故院主御房の極大事は、菩提心論の秘印なり。八葉白蓮一時間等、是れ不二大日の印明なり。内縛して二大の腹を合せて^ヲ誦すなり」(『真言宗全書』第三七卷三四九頁上段)
 柴崎昭和「真空『菩提心論灌頂印明』―附…真空関係資料の紹介―」(二〇〇六年、『小野隨心院所蔵の文獻・圖像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』上)四一頁によれば、文応元年(一二六〇)に頼瑜は、真空より「菩提心論灌頂印明」を授かったという。同論文の四八頁には、隨心院所蔵、鎌倉後期の『菩提心論灌頂印明』の翻刻が掲載されている。
 (21) 前川健一「明恵の思想史的研究―思想構造と諸実践の展開―」(二〇一二年、法蔵館、および同「明恵の『菩提心論』理解―『納涼坊談義記』を中心に―」(二〇一三年、『智山学報』第六二号)の他、岩田親静「明恵と『菩提心論』」(二〇〇三年、『印度学佛教学研究』第五二卷第一号)等を参照した。
 (22) 「已上論文被引事、初心極位^ヲ□□ス事^ヲ證^{セム}カ^カ爲也」(前川健一前掲書「翻刻」三〇七頁)。
 (23) 「于時延応二年五月十六日、禪定殿下に於いて菩提心論を談ぜられ、二十二日に結願に至るの其の間、法門を了簡し、

- 教に依りて之を注進す」(『改訂補日本大藏經』第四七卷三四七頁下段)
- (24) 「問、勝義・行願は証菩提の行に非ざるか。答、唯真言方中即身成仏故是説三摩地法と文り。顯教の悲智は成仏の遠因なり。謂く諸の顯教に於ては果頭、人無し。正しく成仏の時は、皆な諸仏の驚覺を蒙りて真言に入り成仏するが故に、真言行者の勝義・行願は、成仏の近因と為すと雖も、正しく成仏する事は三摩地に有るが故なり。云々」(『改訂補日本大藏經』第四七卷三三三頁下段)
- (25) 「：唯だ是れ三密の相応、五部の秘觀、此れを三摩地菩提心と名く。所以に定心の得難きに非ず。三密相応の易からざると云々。抑も秘經中に微細定易得の法を説く。之に依り只だ法に依り之を修して難易を知らぬ可し。徒に言語を以て談論す可らず」(『改訂補日本大藏經』第四七卷三三三頁下段)
- (26) 「方便為究竟とは、三摩地の菩提心を証す。三密方便は、究竟の果位を作す。已上、教相の分を畢んぬ」(『改訂補日本大藏經』第四八卷一一三頁下段)
- (27) 「又、大師の釈は、菩提心の名を三摩地に立て給へり。此の頌に於いて秘事有り、更に問へ」(『改訂補日本大藏經』第四八卷一一三頁下段)
- (28) 「智山書庫所藏目錄」三二六―三二七頁参照。
- (29) 「文永九年^{壬申}七月朔日、高野山伝法院蔽坊に於いて、伝法會談義の次逐日を以て之を抄し畢んぬ。金剛仏子頼瑜／弘安三年^{庚辰}十月上旬、醍醐寺清瀧礼殿に於いて秋季、菩提心論を談ぜられるの次、少々論義を書入し畢んぬ。頼瑜」(『続真言宗全書』第一卷一七八頁下段)
- (30) 上卷の奥書：「文永二年四月廿八日、当社に參籠するの間、心閑に之を披く」(『改訂補日本大藏經』第四八卷二一八頁下段) 題号下の割注：「廢忘に備えんがために聊か見聞を記す」(『改訂補日本大藏經』第四八卷一頁下段)
- (31) 奥書：「文保二年^{戊午}十一月七日、金剛三昧院に於て御清書を以て本點、斯れを認んぬ。金剛資定一惠^{久福}／于時嘉曆二年七月十八日、卷尾寺靈山院に於て之を書寫す。金剛資良有^{三十一}」
- (32) 「于時嘉曆三年^{戊辰}八月七日、尾州丹羽ノ郡小櫛の安樂寺・学頭坊に於いて談ずるのみ。安超、之を記す」(『大正新脩大藏經』第七〇卷一一五頁中段)
- (33) ⑮宥快の鈔と紛らわしいが、⑬泉宝述「菩提心論聞書」は、『真言宗全書』第八卷の卷頭のごとく、『菩提心論鈔』の名でも流通したようであり、智山書庫にも同名にて幾本か所藏される(註三八参照)。
- (34) 「貞和四年^{戊子}十二月一日、勸学会恒例談義、読師権小僧都泉宝」(『真言宗全書』第八卷一〇七頁下段) 「貞和五年十二月二十日、結願了らんぬ」(『真言宗全書』第八卷二二一頁上段)
- (35) 「：三摩地段に至らんは、雜秘密、事を説くの間、之を略す。凡そ上來、書せる所の功德法門、十の八九に於いて文〇^理に

- (35) 違ふと雖も、万の一毛に至りて論宗に会うべし。唯だ願わくは、此の功德を以て、一切衆生、同じく菩提果極を証すべし矣」(『真言宗全書』第八卷二二一頁上段)
- (36) 『真言宗全書』解題三二頁では、良合は「良含」の誤り、良翁は岩蔵方の祖とする。
- (37) 本圓と同様、性心に師事しながらも杲宝は、⑬『菩提心論聞書』において三摩地段の註釈を省略しており、その対称的姿势は興味深い。
- (38) 『智山書庫所蔵目録』三二六頁参照。『智山書庫所蔵目録』三一五―三二六頁には、『菩提心論鈔』の名で一巻本・二巻本・六巻本・七巻本・十巻本が掲載されている。実際に調査したところ、一巻本は実順『菩提心論口筆』、二巻本(七巻本の後欠)・七巻本(*六巻本は七巻本の誤りであることが判明)は杲宝述『菩提心論聞書』、そして十巻本が有快『発菩提心論鈔』であることが分かった。
- (39) 「応永十有二年季夏、三伏天、高野山西谷の草庵に於いて、夏中籠山の間、客僧等の請う所に依りて菩提心論を講ず。次いで勝義・行願の二段を口筆せしむるに、三摩地段に於いて之を略す。然れども葉城闇裂(葉城闇裂)の大望に依りて、三摩地段を重ねて口筆す(口筆とは三摩地段に筆を施すことなり)。十一箇月の間に抄記し畢んぬ。所詮の旨趣、多く近世の学者の所解に違い、頗る足らず、南指の為に却って後人の玄覽に差じぬ。若し万分の一に於いて法の理倫に会い、奉じて高祖の報恩に資せんのみ。小野末資権僧正実順」(三十四丁左)
- (40) 『仏書解説大辞典』第九卷四二六頁d段には、実順述『菩提心論三摩地段鈔』が記載されるが、おそらく⑯実順『菩提心論口筆』と同一の註釈と推測される。
- (41) 本書の冒頭に「三種菩提心の積の内、上來は勝義・行願、二種の菩提心の積を終る」(『真言宗全書』第八卷三六九頁上段)とある。その上で「三種菩提心の中に於いて浅深を分かつ時は、勝義・行願の二心は、常途に往き互る。第三の菩提心は、五部の秘観、三密の妙行を明かして、自宗不共の菩提心の相を顕すと見たり」(同第八卷三六九頁上段)と述べ、三摩地段こそが、真言宗不共の法であるとの見解を示している。
- (42) 「○下に明かす所の三摩地文は、宝鑰に第十住心を証す。所以ん、科解を止むるは、『玄談』に述ぶるが如し」(『統豊山全書』第三卷八六頁下段)
- (43) 『智山書庫所蔵目録』によれば、智山書庫には本書が六本所蔵されており、⑧頼瑜『菩提心論初心鈔』・⑬杲宝『菩提心論聞書』・⑮有快『発菩提心論鈔』に次いで、智山で多く読まれたようである。
- (44) 『仏書解説大辞典』には、亮汰の著作として他に『菩提心論第三段秘記』(延宝八年刊本)、『菩提心論秘記』(延宝八年刊本)が収載されるが、同一書の註釈書と推測される。
- (45) 恵照は序文で、三摩地段の註釈は、「泊老和上」の指授によると記している。
- 「…等至の章に入りて阿能造の義を挙げ、正覚の決を載す

るが如きに至るは、専ら泊老和上の旨授（指せ）に拠れり。余も亦た師承に拠らざるには匪ず」（上巻二丁右）

(46) 「享保十三年龍次成申、晚秋初十日、今日暗に悲母の忌辰に当り、此の功德を以て無上菩提、乃至、一切含靈平等拔濟に廻向したてまつる」（『統真言宗全書』第一卷三三三頁上段）

(47) 「享保十五年庚戌の秋、同乗学徒の為、重ねて此の論を構す。仍て講中に之を記す」（『統真言宗全書』第一卷三六三頁上段）

(48) 『智山全書』第八卷七七頁の奥書参照。延亨二年（一七四五）に亮海は、貴志村・調月村の諸寺の要請をうけ、春には百三十余人を集めて即身義・声字義・吽字義・般若心経秘鍵を、秋には百五十余人を集めて弁顯密二教論・秘蔵宝鑰・菩提心論を講じたと記録される（『智山全書』解題二二九頁、四七九、四八一頁参照）

(49) 引用文「快公の打集の『抄』」の打集とは、高野山宝門・寿門にて毎年春夏秋冬二季の講会で用いる講本の草稿「内打集（うちたしゅう）」を指すと考えられる（『密教大辞典』一二二頁参照）。宥快の属する宝門では、毎季四人を宝性院・正智院にそれぞれ二人ずつ配し、二十條の打集を講讀するという。⑮宥快『發菩提心論鈔』も、至徳四年（一三八七）五月頃、宝性院で行われた談義にもとづくものであり、引用の『抄』とは同書を指すと目される。

(50) 「維時寛永四未九月、豊山勸学院に於いて、『初心鈔』の開

講の砌、卒爾に之を筆記し、即座に廢忘を補うのみ。希くは後学、焉を訂正せんことを」（『豊山全書』第七卷三九九頁下段）

(51) 「第三言三摩地者已下、三摩地の菩提心を明す。是れ初標なり。三摩地の菩提心は、秘密内証の心地、真言不共の所觀なり。勝義・行願の二門は、彼も亦、瑜伽行者の所觀と雖も、一分顯に共ずる故に、尚是れ遮情門の中の智慧の菩提心なり。入密前方便の分齊なる故に、瑜伽深秘の智慧と為に非ず。今、此の三摩地門の中に於ては、内証甚深の智定を明す。一論の詮要、此に在り」（下巻二丁右）

（キーワード）

『菩提心論』『毘盧遮那三摩地法』

三摩地段 不説段 頼瑜 泉宝 宥快